

成長する神の国

マルコによる福音書 4 : 26 - 34



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年6月16日

聖霊降臨後第4主日

聖光教会にて

今日の福音書でイエスは言われました。

「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて……」

マルコ 4:26

神の国が今日のテーマです。神の国。イエスが公に活動を始められたとき、こう言われました。

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」マルコ 1:15

「神の国」は主イエスの生涯の目的であり、宣教の中心でした。

けれどもその「神の国」とは何か。正直に言いますと、わたし自身長い間ははっきりしませんでした。学生時代に「神の国とは、場所とか領域のことではなく、神の支配ということだ」と聞きました。分かったような、もうひとつ分からないようなままで、長い時間がたちました。そしてある時期にようやくはっきりと分かった。なぜイエスがあればほど「神の国」を人々に呼びかけ訴えられたのか、それが分かる経験をしたのです。

もうずいぶん前のことです。わたしはある教会におりました。そして次第に分かってきたことは、教会の中の力を持ったある人たちのグループが、何十年にわたって教会を牛耳ってきた、ということです。あまり力のない人、比較的新しい人たちは圧迫されて自由にものを言うことができない。何ごともその力ある人たちのグループの意向に沿わなければ痛い目に遭う。

「神の国」ではなく「自分たちの国」「我らの国」が支配していて、弱い人々を窒息させている。これが、イエスが憤り嘆かれた現実であったと感じました。人間の「我らの国」ではなく、「神の国」が必要なのです。

イエスさまの当時、政治的にはローマ帝国が支配し、その下で大祭司を頂点とする神殿グループとも言うべきサドカイ派、律法熱心なファリサイ派などが「我らの国」を固めて力を握り、支配していました。民衆はそのもとで苦しめられていました。

イエスのうちには神への愛と人への愛が燃えていました。そのゆえに、有力者たちが「我らの国」を築いて神と人をないがしろにしているのが許せなかった。神の愛と正義がこの地に満ちあふれ、人々が必要なものを分かち合い、平和と安心を楽しむ——そのような「神の国」のビジョンをイエスをはっきりと見ておられました。それを実現して行こうとされたのです。

そこで今日のイエスの言葉を聞きましょう。

「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。」マルコ 4:26-27

人が大地に種を蒔く。いつの間にか種は土の中から芽を出して、だんだんと成長して行きます。わたしの住んでいる近くには田んぼがあり、麦畑があります。蒔かれ、あるいは植えられ

たものは、初めは細く小さい。それがいつの間にかどんどん成長する。上に伸び、横に広がって密集してきます。もちろん人が世話をしているのですが、それにしてもその成長には驚きます。不思議です。

「土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」 4:28-29

種が蒔かれたその土が実を結ばせる。土が種に水分と養分を与えて、やがて実を結ばせるのです。

神の国は、実際にイエスがおられるところに実現していました。イエスの話を聞いた人が力づけられる。イエスの言葉と行動と存在が人々に間に影響を及ぼしていきます。傷ついた人が癒やされ、孤立していた人が仲間を与えられ、失望を重ねてきた人が希望を与えられる。有力な人々からは白い目で見られたとしても、イエスを中心として愛と祈りで結ばれた人々の群れが、確実に成長して行く。神の国とは、神の願いが実現する世界です。

ところで、イエスはわたしたちにも神の国の種を蒔かれます。皆さん一人ひとりの中にも、神の国の種が蒔かれているのです。その種には命があつて、成長していく。神の国がわたしたちの間で、また皆さん一人ひとりの中で成長しつつあるのです。

イエスは話の中で、「土はひとりでに実を結ばせるので」と言われました。「土」と聞くと、神が最初に人を造られたときのことを思い出します。創世記第2章です。

「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。」2:7

普通は「命の息」が吹き入れられたことを強調し、人の原料は「土の塵」だからもろいもの、はかないものというふうに理解します。けれども今日のイエスの神の国のたとえでは違います。「土はひとりでに実を結ばせる」。土は種を受け入れ、それを自らの中に宿し、種を成長させて実を結ばせる。

わたしが土だとすれば、わたしという土は神の国の種を宿し、その種を成長させる。わたしを、皆さんをとおして神の国はささやかであっても確実に成長して、そして実を結ぶ。神が喜ばれる世界が現れる。イエスがそう言われるのです。

ふと福音書の中のひとり思い出します。アリマタヤのヨセフという人です。ユダヤ人の自治機関、最高法院の議員で、財産のある有力者でした。貧しい人、苦しみを負った人たちの近くおられたイエスとは、距離のあるはずの人でした。しかしどこかでイエスと出会ったのでしょうか。ひそかに彼はイエスの弟子となっていました。が、そのことを世間には伏せていました。

ところがイエスが十字架につけられて殺されたとき、そのアリマタヤのヨセフがローマ総督ピラトに遺体の引き取りを申し

出るので。同じマルコ福音書にこう書かれています。

「アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいたのである。」

マルコ 15:43

「ローマ帝国への反逆者」「神への冒瀆者」として十字架につけられたイエスの遺体の引き取りを願い出るのは、ほんとうに勇気のいることでした。さらにその後書かれていることが大切です。

「この人も神の国を待ち望んでいたのである。」

彼、アリマタヤのヨセフもまた、イエスによって自分のうちに神の種を蒔かれていた。その種は彼の中で芽を出して成長していた。イエスを愛しイエスを信じて弟子になるほどに成長したのです。けれども世間がこわくて、それを隠していた。しかしイエスが死なれたとき、転換が起きました。世間よりも自分の立場を守ることも、神の国のほうが大切になったのです。イエスを愛する思いが溢れて、恐れは消え失せました。彼はイエスの遺体を十字架から降ろして、大切に亜麻布にくるみ、墓に葬りました。今、このアリマタヤのヨセフは神の国の中に生かされて生きています。

わたしたちは無力かもしれませんが。しかしそのわたしたちの中に、イエスが神の国の種を蒔いてくださった。それは成長す

る。何らか実を結ぶ。その実はとても小さいかもしれませんが。しかしイエスさまの目には、それは尊く美しく輝くものです。そしてやがて再びイエスが来られるとき、小さな神の国の実りは一つに結び合わされて、世界を変えることになるのです。

わたしたちも、ささやかであっても、神の国の種を蒔いてそれを成長させていくことを人生の目標にしましょう。

お祈りします。

主イエスさま、あなたはこのわたしたちの中にも神の国の種を蒔いてくださいました。それが成長して実を結ぶと言われたあなたの言葉を信頼させてください。わたしたちもいろんな悩みや課題を抱えつつも、あなたとともに神の国の種を蒔き、あなたとともに喜ぶようにしてください。アーメン